

# 幸運とは、 準備とチャンスが出会ったこと

## 有森 裕子

スペシヤルオリンピックス  
日本理事長



● 聞き手 東京都連  
甲野 恵美  
● 写真 小島 眞二

——一九九六年のアトランタオリンピックで、二天会連続でメダリストとられたとき、「初めて自分で自分をほめたいと思います」とおっしゃって、私もテレビの前で思わず涙しました。その後、国連人口基金の親善大使をはじめ、さまざまにご活躍されていますが、スペシヤルオリンピックスでは、理事長を務められていると伺いました。

恥ずかしながら、よく存じていませんので、今日は、そのスペシヤルオリンピックスについて教えていただきたいと思えます。よろしくお願いたします。

こちらこそ、私が関わったのは二〇〇二年に、当時の理事長である細川佳代子さん（元総理大臣細川護熙夫人）にお声がけいただいたからなんです。それまでは私もスペシヤルオリンピックスについてよく知りませんでした。

私は岡山出身なんですけれども、岡山には旭川荘という大きな社会福祉施設があるんですね。その付属の旭川荘厚生専門学院の事務に母が勤めていたものですから、物心ついたころから、そこにいる人たちがどうこう

という説明を受けずに、毎年、地域のお祭りやイベントと一緒に参加していました。ですから、障害について「特別」という意識がなくて、障害のある人でも、ケガをしている人でも、お年寄りでも、不便そうな人がいたら手伝う、という思いでいます。

スペシャルオリンピックスに関わって、ただ一つ驚いたのは、知的障害者は知的障害があるがゆえに、スポーツをしてこなかったということ。そして、スポーツを通して世界に行くチャンスが持てる大会であると知って、応援しようと思いました。

スペシャルオリンピックスがパラリンピックと異なるのは、アスリートが全員、知的障害者ということです。

——そうなのです。

スペシャルオリンピックスはどのように始まったのですか。

一九六二年に故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シユライバー夫人が、自宅の庭を開放して開いたデイ・キャンプがスペシャルオリンピックスの始まりです。知的障害があるために、まだ一度もプールで泳いだり、トラックを走ったり、バスケットボールをしたことがない人たちにスポーツを提供する、それが彼女の願ひでした。実は彼女の姉のローズマリーには、知的障害がありました。

一九六八年にジョセフ・P・ケネディ財団（第二次世界大戦で戦死したケネディ家の長男を記念して一九四六年に設立された財団）の支援

により組織化され、「スペシャルオリンピックス」となり、イリノイ州シカゴのソルジャー競技場で「第一回スペシャルオリンピックス国際大会」が開催されました。このとき、アメリカ国内二十六州とカナダから千人以上のアスリートが参加しています。

また一九八八年には、国際オリンピックス委員会（IOC）と「オリンピックス」の名称使用や相互の活動を認め合う議定書を交わしました。本部はアメリカ、ワシントンDCにあり、現在、スペシャルオリンピックス国際本部の会長を、創始者ユニス・ケネディ・シユライバー夫人のご子息であるティモシー・シユライバー氏が務め、世界百八十か国で四百四十万人のアスリート、百万人のボランティアが参加するグローバルなムーブメントに成長しています。

——設立にはケネディ家に関わり、キャロライン・ブービエ・ケネディ駐日米国大使の叔母様が始められたのです。

スペシャルオリンピックスは、実際、どのように行われているのですか。

オリンピックス・パラリンピックスと同じで四年に一度、夏季、冬季の世界大会が開催され、オリンピックス競技種目に準じて行っています。

スペシャルオリンピックス独自のルールがあり、アスリートの可能性が最大限に発揮できるよう、デイビッド・ニング——性別、年齢、競技能力などによってクラス分けを行い、ほぼ同じ競技能力レベルで各競技を競います。

また表彰は、各デイビッド・ニングごとに行われます。一位から八位が入賞で、全員が表彰台上がって、一位から三位には金銀銅メダル、四位以下にはリボンが贈られます。失格となったアスリートにも参加賞のリボンが贈られるので、ほぼ全員が表彰されます。チャレンジした、勇気が持てたということに対する、リスパクトと讃えの精神から来ています。

スペシャルオリンピックスでは、日々、各地で行われているトレーニングが世界中につながっています。オリンピックスと複数形で表現されるのは、日常的なスポーツトレーニングが、たくさんさんのチャレンジが、毎日のように世界中で行われていることを表現していることなのです。

——他の人に勝つのではなく、アスリートが

## プロフィール/ありもり・ゆうこ

1966年岡山県生まれ。日本体育大学卒業後、㈱リクルート入社。1992年のバルセロナオリンピックでは銀メダル、1996年のアトランタオリンピックでは銅メダルを獲得。2007年、日本初の大規模市民マラソン「東京マラソン2007」でプロマラソンランナーを引退。

1998年NPO「ハート・オブ・ゴールド」設立、代表就任。2002年4月アスリートのマネジメント会社「ライツ」（現株式会社RIGHTS.）設立、取締役就任。国際陸連（IAAF）女性委員会委員、日本陸上競技連盟理事、国連人口基金親善大使、笹川スポーツ財団評議員、社会貢献支援財団評議員等を歴任。

2010年6月、国際オリンピック委員会（IOC）女性スポーツ賞を日本人として初めて受賞。同年12月、カンボジア王国ノロドム国王陛下より、ロイヤル・モニサラボン勲章大十字を受章。

最善を尽くす——正にオリンピックの精神ですね。

スペシャルオリンピックスでは、知的障害のある人たちの日常生活にスポーツを根づかせることで、彼らの自立と社会参加の促進を図っています。また、そこには多くの方がボランティアとして参加しています。スポーツによる交流を通して、お互いを理解し、尊重し認め合うことを目指しています。

知的障害者は、行く道を作るチャンスをもらえなかっただけなので、できない人たちゃいないんですね。やらせてもらえなかったということが一番の問題です。

障害、不便さというものは、度合いは違えど、誰もが持っていると思うんですよ。

私たちは不便があっても、チャンスが当たり前にもらえます。それによって、不便さがカバーできるようなったり、できなかったことができるようになったりと、さまざまに可能性を産み出せますが、彼らは本人の意思がうまく働かないということで、チャンスがもらえません。周りに判断されて、「知的障害がある、じゃあ何もできないよね」という状況が、私は問題だと思っています。

このスペシャルオリンピックスは、スポーツを通して、彼らに、彼らを持つて生まれたものを活かす場を提供して、それをチャンスとして、次なる人生への変化をもたらす存在になっています。

——スポーツが人の成長を促す、と考えることなのです。

スポーツにおいて全力でトライするという力の出し方は、日常ではなかなかできません。スポーツが自己の持っている力へのチャレンジを促すことによって、自分の存在意義を確認できたり、変化への流れを作れると思うのです。そして、応援するほうも、応援することによって自分が元気になるんです。こういうエネルギーが生まれる現場は、スポーツしかないと思うんですよ。

スペシャルオリンピックスのアスリートは一生懸命頑張っているので、関わったボランティアやファミリーも彼らへの応援を通して、変化が見られます。共に育つという共育の場、その要素を持ったものが、スペシャルオリンピックスで、人間はチャンスをもらえることが一番の幸福だと思います。

ただ、確かにアメリカでスタートしたとき、自閉症の子どもが自己表現できるようになった、言葉が出て行動が落ち着いてきたということで評価されたようですし、日本でも、世界大会に行つて自分に自信が持てるようになり就職できた人もいますが、そういう変化に大きな期待をかけずに、まずこのチャンスを使ってもらふこと、参加していただくことがスペシャルオリンピックスにとって大事なことだと思っています。

日本では、まだ国内の知的障害者数の数パーセントの参加——約七千八百人なので、日本でもスペシャルオリンピックスが広まり、当たり前前の活動になってほしいと思っています。



写真提供：スペシャルオリンピックス日本

——パラリンピックではアスリートが活躍することで身体障害者への理解と尊敬が進んだように思います。スペシャルオリンピックスでもきつと同じことが起きますね。

私もそう思います。

知的障害の場合、例えばダウン症のお子さんが、大胆でハツとするような色彩で絵を描くと、その瞬間に、「ダウン症の子どもはすごい色彩感覚を持っている」と言われることがあります。でもそれは、その子どもたちの個性、特技であつて、ダウン症だからではないはずで、素晴らしい絵を描いても、名前の前に入る



「知的障害者」とか「ダウン症」とか。この言葉を入れた途端、その才能が障害に由来していることになりす。このことに気づかないと、たぶん、いつまで経っても不平等な社会だと思っています。

——音楽家の方で、「障害があるから素晴らしい音楽を奏でるではありません。私の音楽だけを評価してください」とおっしゃった方がいますが、同じことですね。

こういう活動、国連人口基金やスペシャルオリンピックスなどに関わられた有森さんの大もとは何なのでしょうか。

共に育つという共育の場、その要素を持ったものが  
スペシャルオリンピックスです。

大もとは、スポーツを通して生きてきた自分にできることをした、というだけなんです。ね。

樹きに例えると、走ることを続けてきて「マラソンランナー有森裕子」という幹ができ、こちらに枝が伸び、あちらに実がなつての、枝、葉、実が今の活動なんです。私にとって特別なものでなく、自然な流れです。

私の身体的な能力は、ずば抜けて高いわけではなくて、メンタルの部分の伸ばして、身体能力を育ててきたように思います。人との出会いによってチャンスをもたらしてきたし、

同時に、不器用ながらも自分を何とかしたいと思う気持ちを持ち続けたことですね。絶えず手を伸ばしつづけて、掴める物はすべて掴んでという。それを繰り返し返してきたことが、いろんなものに繋がったんだと思います。

——走ることが好きで、今の有森さんがおありになると思っていますけれども、走ることにどのような魅力があるのですか。

私は、走ることを好き嫌いで考えたこと

がないんですよ。

両脚関節脱臼で生まれて、小学生のときは体も堅いし、動機的には全然良くなかったです。勉強も含めて、何をやってもうまくできなくて自信が持てず、自分にもできることを見つけた、存在を認めてもらいたいという気持ちがありました。

小学校五年生のとき、顧問の先生に憧れて陸上部に入り、顧問の先生から「有森はよく頑張る」と言われ、頑張れば褒められると信じてしまいました。

中学に入って、私はバスケット部に入りました。陸上部はあったものの休部同然だったんです。でも、バスケットでは、チームが勝ちました、じゃあ自信を持てますかと聞かれたら全然違うんですね。大人になれば「チームの勝利は自分の勝利だ」と言えるけれど、補欠ということもあって、勝利したところがない自分には、自信が持てません。

それで、体育祭の八〇〇メートル走に自ら立候補して出場しました。

なぜ八〇〇なのか——人気のある種目は、すぐにほかの生徒たちが持つて行ってしま、チャンスが残ってないんです。皆が選ぶものを選んでちゃダメなんだと気づいて、希望者があまりいない八〇〇メートル走にしたのです。「やった！やらせてもらえる。チャンスが来た！」って思いました(笑)。

自分で決めたことなので、頑張って自主練習をして、学年別の対抗の中でたまたま優勝という結果が残せました。とっても嬉しいと



自信がつくプロセスが踏めるもの——走るとは自分を見つけて出すための手段でした。

ころに、「できるんだね」という評価をもらえました。一人でゴールできると

いうことは、すごく分かりやすい、自信を持てる形なのです。

実は、興味があつて楽しかったのは美術でした。自分の好きなように色づけしたり、発想を生かして、はつきりとした順位がつかないから。しかし、「順位」というのは分かりやすい物差しです。できる・できないが分かる。同時に、自分というものを意識でき、自信が持てます。

ですから、自信を持つためのチャンスを探していた自分にとって、走ることが好きか嫌いか、それは、ある意味、すごく贅沢なことでした。

——順位がつく、大事なことなのですね。

自信がつくプロセスが踏めるもの、一生懸命できるもの、結果になるもの——走ること、それらを見つけて出すための手段、自分を見つけて出すための手段でした。好きか嫌い



楽しいか楽しくないか、それらはいずれ味わうのだけれど、そうなるまでに踏ん張って準備して、チャレンジすることが大事です。

アメリカの有名女性司会者・女優であるオプラ・ウィンフリーの言葉に、「幸運とは準備と機会が出会うこと (Luck is a matter of preparation meeting opportunity)」と云うのがあります。これは、人間として変化をもたらすことができる要素を持つて生まれ、準備ができているところに、機会がもたらえれば、ラッキーだけれど、機会がもたらえなければ、

変化が起こせないから不幸ですよ、という意味です。

——準備とチャンス——有森さんの生き方は、スペシャルオリンピッククスと通じていると思います。

「著書『わたし革命』(岩波書店)を拝見して、はたからではうかがい知れないスポーツマンとしての苦悩を知りました。それが、「初めて自分で自分をほめたい……」との言葉になったのですね。

今から十八年前のことになります。バルセロナからアトランタまでの流れを思い出す中での言葉です。バルセロナの後、銀メダルを獲得した喜びとその後の葛藤——人としてもスポーツマンとしても苦しんだ中で、よくぞ元に戻ったと思いました(笑)。何でもつと頑張れなかつたんだらうと思うレースはしたくなかつたので、結果が出せた自分を誉めたいという気持ちになったのです。

スポーツは、記録と記憶を残せるという意味で、最高の芸術だと思えます。

——十八年も経つたのですね。本当にスポーツの感動は、何年経つても心に残ります。

今日は、心に響く、一つ一つのお言葉、ありがとうございました。お会いできて、うれしかったです。

ぜひまたお会いできたらと思います。今度は、スペシャルオリンピッククスの現場で。

(次回はシンガーソングライター・沢知恵氏の予定です)